

か」とはじめて立ち止まることがで  
きた場面でした。

教科の学習の中で学習課題の解決に取り組んでいる時は、どの子も、課題の解決に向かつて学習に集中して取り組むのが大事だと思い込み、そのような一年生に育てようとしていた自分の身勝手さに気づくことができた瞬間でした。また、子供は主体的に学んでいるということ、その学びというのは、教師が意図したことは勿論、それ以外のこと、意図したこと以上に五感を通して学び取つてゐるということを改めて意識した瞬間でもありました。

その日以来、しばらくの間、当時の一年生の担任四人は、「感性」について話し合つたように記憶しています。そして、「夏だなと感じる心」「きれいだなと感じる心」「どうしたのかな」と氣遣う心「かわいそうだなと思ふ心」等や、「おもしろそุดな」「やつてみようかな」「こうすればいいのかな」「どうしようかな」等と思う心（アンテナ）は、いつも子供の心持ちに繊細に伸びていて、その子の言動を決定しているのではないかとなりました。また、そのような心持ちを理解し、子供たちとの日々のふれあいの中で、そのような心持ちを育んでいくこと、できれば強めていくことが一年生にとっての学校生活では大切なことなんだという結論に達

しました。

そして、教師の身勝手で子供の主体的な五感を通した学びを妨げることがないようにしようということから、教師が意図していない行動に出会つた時こそ、どの子にも「どうしたのかな」という言葉を最初に掛け、教師が子供のことを判断するのではなく、理解することを心がけました。

初めて一年生を担任し、小学校一年生と六年生が持つアンテナの伸び

と質の違い、また小学校教育の醍醐味と教師としての責任というものを

体験を通して学んだ年でした。

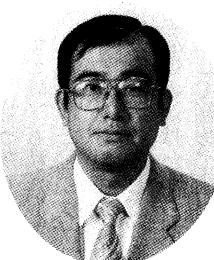
一人一人の感性を育てるための教師の不斷の配慮の重要さを痛感しています。感性はその子に接する大人が育てる大切な心持ちなのです

から。

（白河市立白河第一小学校教諭）

## 「チームワーク」とは

鈴木教正



「チームワークがいいね」と聞くことがあるが、チームワークがいいということは、どういうことだろう。私がいつも考へている「チームワーク」とは、「一人一人が自分に与えられた仕事を責任をもつて果たすこと」だと考へている。たとえば野球で、打者が三塁ゴロを打つたとしよう。これを処理するのは、三塁手である。遊撃手がどんなに上手だとしても三塁手の前にきいて處理するわけにはいかない。三塁ゴロは三塁手がしつかり取つて一塁

つまり、基本は自分に与えられた仕事を責任をもつて果たすことである。自分に与えられた仕事もできないのに他人の世話はできない。まず自分自身に「力」をつけることであります。感性はその子に接する大人が育てる大切な心持ちなのです

人ではできないことも話す。「一人で練習できるのは、素振りやシャドウピッチング等。キャッチボールをするにもトスバッティングをするにも相手が必要である。自分のために練習の相手をしてくれる仲間に対しての感謝も忘れないようにしよう」と話す。

野球を通して私自身いろいろなことを学ぶことができ、それが今生きていくときに大役に立つている。これからも少しでもいいから生徒に語つていただきたいと思う。

学校での「チームワーク」を考えたとき、自分の仕事は何か。また、責任をもつて今、自分は仕事を果たしているのか。つねに反省しなければならないと思う。

これからも白球を追う生徒たちに